

年代をふりかえって

公民館報第一号は、昭和二十六年六月十日はじまり、昭和五十三年三月、ついに第二〇〇〇号の発刊になりました。これを機会に歴代の町長、助役等という方々がおられたのが、また予算などがどうにかかわってきたか、ふり返つてみるものたいへん意義深いものがあると思ふ。

わたしたちの日常生活に關係の深い、米・酒

津奈木町予算額の推移（一般会計）歴代の教育長とらおかめ

津奈木民話
(五) 堀 二雄

場所	津奈木町倉谷	樹齡	二百年(推定)
所有者	丸田民也	高さ	三メートル
種類	紅梅(すだれ)		



場所所有者種類	津奈木町倉谷丸田民也紅梅(すたれ)	樹齡	二百年(推定)
		高サ	三メートル

何時の間に、か村から姿を消したが、またしもんのお糸が、哀れで、村人達は里の坊様をお連れして来て、お経を上げてもらつてゐると、お糸の姿はだんだん別なものに變つて、一匹の大蜘蛛となり、しかも割れた額の傷口から血が流れ出し世にもおそろしい姿とな云う。

全完

町ぐるみペーロン誕生

ちなみに筆者は三十二年の九月、藤峰先生にはお目にかかった。その時の模様を昭和三十三年十月号に載せた。文の最後に「……………私はひとり思う。先生は何をいうても九十五才であられる。御病氣になられてからではおそい。先生が御健康であられる今日、永く御健康であられるように神にお祈りして。……………」と書いた。先生はひと月もたたぬうちに、お亡くなりになった。

町ぐるみペーロン誕生

昭和四十年夏のペーロンは中止された。理由は舟が古くなった。青年が出てしまつて舟に乗るものがいなくなつたと。そのとおりであつた。しかし、ペーロンのないお盆はさびしかつた。カン・カン・カンという音とリズムが血の中にしみ込んでゐる津奈木町民には、睹れることを許さなかつた。そして町費で舟を造り、海岸部落の専有にせず、町内全部落のものとして復活した。

当時の新聞に、その発案者は教育長岡松壮と書き立てられたが、実はその立役者は公民館主事であつた浜本繁巳君であつた。町議会の賛同を得るまでいろいろと関係すじを走りまわつた。浜本君は津奈木ペーロンの功労者であることとをここに明かにしておく。~~~~~

昭和四十一年八月二十五日第一三八号「町ぐるみペーロン町長斉藤竜麿」の記事より~~~~~

昭和三年五月二十九日、公民館運営審議委員一行十三名が鹿本郡鹿北村を視察した。その視察座談会記が、同年六月の六八号にのつてゐる。反省会には村の発展を思つていろいろの意見が出た。

松本 敏 平凡な真理を発見した。それは人^ハ和^ニすです。おたがいがそれぞれの立場を理解し合うことです。農協長は組合員のことを、組合員は自分の農協だから盛り立ててゆくことと一体となつてここに農協の発展があるのです。

深水正人 完全給食を

談 会 記

でも、受け取る方、動

村は一本 鹿北村視察座談会記

から入っていますか
い、筍、茶の製造販売等村一丸となつて買手に当るなど
羨しい。……

このようにして公民館運営審議員は先進地をたびたび視
察し、このように津奈木の発展に寄与したと思う。旅費
は手当を貰わずに貯金して充てた。そのころは会議は毎
日開かれていた。

「あーい、さっ」
津奈木公民館報が生まれたのは昭和二十六年六月十日である。年令からいへば二十才になる。発行数からいへば二百号である。

毎月出た年もあり、三カ月に一回出たこともあり、最近では二月に一回出ているので、月数とは一致していない。しかし中途で中断されたことではない。つまり二十七年間連綿として続いていることは、館報が有つてもよいといつてである。無用の長物であれば消えているはずである。

とはいえ「愛されている」と思つてどうもはばれてはいるが、

「新聞は足で書け」という。また「犬が人に噛みついたで、人は人は読まぬ。人が犬に噛まれたで記事になる」といふわれわれ編集委員は「一層努力して」「おもしろく、ためになる」「公民館報を作るよ」にしたい。そして、町民から愛される公民館報としたい。

昭和五十三年三月号は二百五号である。これから三百、五百、千と永遠に津奈木と共に発展することを祈るものであつて、どうぞ悪いは悪いとして御指導賜わりたい。

編集委員長 岡松 壮

写真で
ふりかえる



千代の七本松



昔の公会堂
憶い出の公民館



干拓前の鎧が崎



移転前の阿蘇宮